の付いた、広い部屋を提供された。
一時間ほど、電報と新聞を読んだ後、大統領の書斎に赴いた。
一通の電報が、大統領のもとに届いた。
何も云わずに、ルーズベルトは電報をチャーチルに手渡した。
「トブルクは陥落、捕虜二万五千」
とても信じられない……。
副官が、即刻、ロンドンに問い合わせた。
リビアのトブルクの陥落は事実だった。捕虜は三万三千だという。この失陥により、アレクサンドリアが爆撃される可能性が高くなった。
「満月が近いので、東部艦隊を地中海から運河南部に移動させたい、とロンドンは申しておりますが」
チャーチルは、自らが受けた衝撃を、同盟国の大統領に対して隠す事をしなかった。
(敗北と不名誉は別のものだ……)
「わが国は、何をすればよいでしょう」
大統領は、訊ねた。
「戦車を、できるだけ多くのシャーマン戦車を、出来るだけ中東に送ってください」
ジョージ・マーシャル将軍が、呼びだされた。
「シャーマンは、まだ生産がはじまったばかりです。先週、やっと最初の三百台が配備されました。次の三百台は、来週にも用意できるでしょう」
マーシャルは、少し考えてから云った。
「そう、それから一〇五ミリ自走砲は、百台なら、すぐに送る事が出来るでしょう」
とりあえず、エンジンを装着していないシャーマン三百台と自走砲が、六隻の高速船に積み込まれた。
エンジンを積んだ船は、バミューダ沖で、ドイツの潜水艦に撃沈されてしまった。
けれど、マーシャルはただちに三百台のエンジンを、進発させた。
アメリカの工業力の、爆発的な力量を、チャーチルは改めて認識した。

∴

彼の人は、木戸幸一内大臣を召して、質問した。
「ドイツ軍がトブルクを陥落させ、エル・アラメインに進撃しつつある。ヒトラー総統へ、祝賀の親電を打つ必要はないか」
ミッドウェーの失陥以降、戦争の先行きに不安を抱きはじめていた彼の人にとって、ドイツの大勝は、久しぶりに心躍る報せだった。
木戸は、「武官長と検討させていただきたく存じます」と云って、御前を退いた。

蓮沼蕃侍従武官長と、相談した後、報告に訪れた。
「ヒトラー総統から、わが方に対して、戦勝の祝電など届いた事がございません。当方から先例を作る事は慎重を要するかと存じます。目下の状況におきましては、祝電等については、無き事とするのが適当と存じます」
内大臣の言葉を、彼の人は受け入れた。

∴

生さぬ仲の娘のために、妻のシヅ子は毎日、出歩いて嫁入りの衣装や箪笥を物色していた。
もちろんヤミである。
「まだ、結婚相手も決まっていないのに、おかしいじゃないか」
獅子文六は、何度も云ったが、母としての意地というか迫力があって、余り強くも云えなかった。
総力戦体制下、贅沢品は事実上、製造禁止だったので、一通りの嫁入り仕度を用意するのは、大変だったが、さほど強健でもない体を押して、毎日、シヅ子は出掛けていた。
「ママって、本当に時局的じゃないのね」
娘の巴絵は呆れていた。
その一方で、獅子は開戦後、突然軍人贔屓、それも若い軍人に肩入れをはじめた。
「どうしたんですか、軍人があんなに嫌いだったのに」
シヅ子の皮肉な口調が、ちょっと癪に障ったが、何とも云い返さずにいた。
「若い人だって嫌いだったでしょう」
その通りだった。
二十代の生意気で、小癪な若い男が大嫌いだった。
(それは、二十代の自分を、今でも嫌悪してるからだが……)
皮膚病に罹った野良猫のような若者たち。

あなたの本を文藝春秋で作りませんか?
自費出版のご案内
一冊の本を作るには、手間ひまがかかります。
全体の構成、原稿の整理、文章の校正、装丁等々。
当然それなりの経費がかかりますが、必ず、
ご満足のいただける「あなたの大切な一冊」をお作りします。
●誰に読んでもらいたいかを一緒に考え、原稿の完成度を高めます。
●ずっと残るものだから、手抜きのない編集制作をします。
●文藝春秋の刊行物として品質を保つため、刊行点数を制限しています。
●書店での流通をご希望の場合には、販売委託制度がございます。
文藝春秋企画出版部
〒102-8008
東京都千代田区紀尾井町3-23
TEL 03-3265-1211(代表)
FAX 03-3265-1257
http://www.bunshun.co.jp
■案内書進呈/見積もり無料